

平成 26 年度

香川大学大学院地域マネジメント研究科

アドバイザー・ボード会議報告書

平成 27 年 6 月

目 次

アドバイザー・ボード委員名簿.....	2
アドバイザー・ボード日程.....	3
I. アドバイザー・ボード記録（平成 27 年 6 月 17 日）	4
II. 説明資料.....	37
III. 出欠表	40

アドバイザー・ボード委員名簿

経済界 (五十音順)	(委員長) 松田 清宏	四国旅客鉄道(株) 取締役会長 四国ツーリズム創造機構 会長
	家高 順一	四国電力(株) 取締役副社長
	高濱 和則	大倉工業(株) 代表取締役社長
	竹崎 克彦	(株)百十四銀行 会長 高松商工会議所 会頭
行政 (五十音順)	大西 秀人	高松市 市長
	天雲 俊夫	香川県 副知事
大学	王 効平	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科 研究科長

アドバイザー・ボードの日程

期 日：平成 27 年 6 月 17 日（水） 11：30～13：30

会 場：香川大学幸町キャンパス又新記念館 2階 第 2 会議室

議 事

11：30 開 会

研究科長挨拶

配布資料確認

アドバイザー・ボード委員の紹介

地域マネジメント研究科出席者の紹介

検討課題の課題解決計画

平成 26 年度事業報告

13：00 審 議

13：30 閉 会

I. アドバイザリー・ボード記録

原 : それでは時間になりましたので、これより香川大学大学院地域マネジメント研究科平成 26 年度アドバイザリー・ボードを開催させていただきます。

最初に、私からご挨拶をさせていただきたいと思います。井原先生、関先生、そして板倉先生のあとにつづきまして、4 代目といたしまして、平成 27 年度、今年の 4 月より研究科長をさせていただいております、原でございます。どうぞよろしくお願い致します。まずお礼を申し上げさせていただきたいと思います。委員の皆様にはご多忙の中、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。深くお礼を申し上げます。

本ボードは平成 16 年度の地域マネジメント研究科の開設とともに発足し、今回が 11 回目となります。代々の委員の方には当研究科の運営に関しまして、貴重なご意見を頂き今日まで支えていただいております。昨年度まで、アドバイザリー・ボードの委員長を務めていただいておりますネッツトヨタ高松 代表取締役会長でいらっしゃいました木村 大三朗（キムラ ダイザブロウ）様が本当に残念ながらお亡くなりになりました。その為、新しい委員長としまして JR 四国取締役会長であり四国ツーリズム創造機構会長でもあります、松田 清宏（マツダ キヨヒロ）様にお引き受けいただくことになりました。ただ先日の金曜日に国土交通省から発表されました「広域観光周遊ルート形成計画」に「スピリチュアルな島～四国遍路～」が選ばれました。そしてその申請者である四国ツーリズム創造機構の松田会長は、本日は大臣からの認定証授与式に急遽出席しなければならなくなったということで、残念ながら本日はご欠席となります。

現在、委員をお願いしておりますのが香川県副知事 天雲 俊夫（テンクモ トシオ）様。北九州市立大学大学院マネジメント研究科長 王 効平（オウ コウヘイ）先生。また百十四銀行会長であり、高松商工会議所会頭 竹崎 克彦（タケサキ カツヒコ）様の代理で本日は百十四銀行 執行役営業統括部長 頼富 俊哉（ヨリトミ トシヤ）様。四国電力取締役副社長 家高 順一様（イエタカ ジュンイチ）の代理で執行役員 企画部調査役 馬場 一壽（ババ カズヒサ）様。高松市長 大西 秀人（オオニシ ヒデト）様の代理で高松市副市長、加藤 昭彦（カトウ アキヒコ）様となっております。

尚、本日はやむおえない事情でご欠席でございますが、委員として任期を満了しました大倉工業元相談役 鴻池 正幸（コウノイケ マサユキ）様に代わりまして、ご就任いただきました大倉工業代表取締役社長 高濱 和則（タカハマ カズノリ）様がいらっしゃいます。それぞれにご要職になりながらこのようにお力添えいただきまして重ねてお礼を申し上げます。

先ほど申し上げましたように本日は委員長の松田様がやむ負えない事情でご欠席ですので、代わりまして天雲様に議長代理をお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

天雲： それでは本日私が委員長の代理を務めさせていただきます。ご協力のほど宜しくお願い致します。

先程の原研究科長様のご挨拶もありましたように今回ビジネススクールの現状を把握しご意見をいただくことが趣旨ですので、以降、進行を大学側の方にお任せしたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

原： 以降は、進行を務めさせていただきます。

それでは運営について説明させていただく前に、恐縮ではございますが自己紹介を賜ればと思います。それでは天雲様より席順でご紹介をお願い致します。

天雲： 天雲でございます。どうぞよろしくお願い致します。

ビジネススクールには創設以来お世話になっております。最初の井原先生は本当にもう非常に熱心な方で、それ以来ずっと関係を続けさせていただいております。本当に年々充実させていただいております、県の方からも毎年何人かずつ研修生で派遣させていただいております。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

馬場： 四国電力の馬場でございます。どうぞよろしくお願い致します。本来のメンバーであります副社長の家高がどうしても外せない用務がございまして今日は失礼いたします、代理で参りました。経営企画部で調査役ということで企業関係の調査ですとか地域の活

性化の関係の仕事もやっております。部内には、今、経営企画部の一人若者でこちらの研究科でお世話になっております。入社4年目でしょうか。澁刺と一生懸命勉強したいという熱意の持ってさせていただいております。

どうぞよろしくお願い致します。

頼富： 百十四銀行の頼富でございます。今日は会長の竹崎が所用で私が代理で参りました。

私がいる営業統括部というところには、今盛んに言われている地域創生のところ、地域活性化のところを担当しております。我々のチームにも研究科の卒業生もおりますし、一生懸命地域の為の頑張っておりますので、引き続きよろしくお願い致します。

加藤： 高松市副市長しております加藤と申します。大西市長が今日出張中の為、代理で出席させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。高松市も毎年2名がお世話になっております。本当にありがとうございます。

私も以前、企画財政部の次長、政策の担当だったときに、地域マネジメント研究科に本当にお世話になりました。よくお話しするときに私の方から思入れといいますか喋るのですけれども、文科省の方から広域拠点のあり方について、共同研究というもので香川県、高松市、地域マネジメント研究科と一緒にやりました。その時にまとめていただいたのは、クリエイティブな都市づくりということで海園都市構想でありますとか、コンパクトな街づくりでありますとか、クリエイティブコア構想とか、今の高松の街づくりの基本となるような骨格の部分でございまして、総合計画に盛り込まれておりますし、今の市長も参考とするところもある、そういった共同研究をやったという、非常に思い出深いものがございました。

今日は代理で出席させていただくということで、そのことを思い出しながら出席させていただいております。

どうぞよろしくお願い致します。

王： 北九州市立大学ビジネススクールの王効平でございます。

うちのスクールの方が地域マネジメント研究科より3年間遅れてスタートしたのですが、最初の研究科長の井原先生、関先生、板倉先生にご教授いただき設置することができ、認証評価にも多大なアドバイスをいただきました。当初37名の学生を迎えたわけ

ですが、毎年、本部で教員同士でお互いの情報交換をできるようにと考えておりますけれども、なかなかできずに申し訳なく思っております。でも、私は研究科長を今年で3期年させていただいておりますが、在任中にぜひ実現させたいと思いますので、引き続きご協力願いたいと思います。

よろしくお願い致します。

原： ありがとうございます。ありがとうございました。どうぞよろしくお願い致します。

昨日雨が降りまして、今日は天気良いですけれども蒸し暑いですので、上着などを脱いでいただいてリラックスしていただきたいと思います。よろしくお願い致します。

本日は、私を含め13名の教員が参加させていただきます。1名、國村先生はただいま公開講座の授業をしているということで少し遅れて参加する予定となっております。

それでは私から席順に自己紹介させていただいております。尚、この席順はオレンジ色の「2015年度要覧」の教員紹介の順でございます。

まず、私の7ページ上の方をご覧ください。改めまして原真志と申します。私この4月から研究科長を務めさせていただいておりますけれども、今となっては数少ない本研究科の創造期からいるもので、自分もまだまだ若手だと思っていたらもうそういう年代になったのかなと思っております。

私の担当しておりますのは、地域マネジメント論というのとクリエイティビティと地域活性化とその発展としての実践型クリエイティブワーク演習がございますが、地域マネジメント論と言いますのは、昨年度までは産業クラスター論が遅れる形で開講しておりました授業を基礎科目という形にして少し基礎的なものと言いますか、地域活性化関するものを強化して改めて今年から提供するというところでございます。今までの産業クラスター論も受講者の方にはそういう産業クラスターというような制作と言いますか、製造業関係や集積だけではなくて、地域活性化の全体の基礎的な内容ですねといただいておりますけれども、そういう部分をさらに強化して今までの企業を中心とした計画組織論というものを地域活性化のところに要素としたら、どういうところに力を入れたらいいかと更に強化して提供していけたらと考えているものでございます。

クリエイティビティと地域活性化は今、加藤副市長からも創造都市、高松のあり方のこともありますが、私もその広域拠点のあり方に関するプロジェクトは高塚先生がかなり中心的にやられておりますけれども、後半のところではクリエイティビティというも

のがキーワードとなっていたところを私も参加させて協力させていただきました。そういうクリエイティブな側面を地域活性化に活かすにはという観点で私も研究をしておりますが、それを授業に活かすということで昨年度から始めた新しい科目でこれもできれば実際の活性化に活かしいてもらえるような形で貢献できればと考えておるところです。

宜しくお願い致します。

高塚： 高塚でございます。今年度より原研究科長の元で副研究科長を務めさせていただいております。私の授業の担当は、こちらの資料にありますとおり統計分析と都市開発論を担当しております。

一方、委員としてはずっと入試関係の委員をしております、こちらからも申し上げますと後でご紹介いたしますが、本年度の入試は非常にたくさんに新入生が入っていただきまして、過去最大の数に40名の入学者となっております。地方創生ですとかいろいろ追い風が地域マネジメント研究科にとっては吹いているのかなど。そういった養成に耐えるように我々も頑張っていきたいと思っております。

私は都市開発を専門にしておりますが、最近は福祉や医療、介護等も含めて持続可能な都市の経営を考えていけたらいいなと思っております。

また今後とも宜しくお願い致します。

板倉： 板倉でございます。要覧では8ページの上に紹介がございます。担当しております科目はマネジメントシステム、経営戦略に関する基本科目と、昨年度から地域産業のオーリーブの振興に関する科目ということで、昨年度からオーリーブ事業化マネジメントの取りまとめを担当しております。

委員としまして4年間研究科長を務めておりまして、今年は学生生活委員長というものをやっています。

貴重なご意見を伺うということで宜しくお願い致します。

木全： 木全と申します。宜しくお願い致します。要覧の8ページに簡単な略歴と研究内容等をご紹介させていただいております。僕はかつて記者をしております、こういった紙媒体に研究科を紹介するような要覧であるとか、概要、地域マネジメントという情報誌

と呼んでいますけれども、こういった中で研究科の修了生のプロジェクト研究であるとか、或いは地域の資源というものを発信していくような内容の冊子の製作を担当しております。

担当科目ですけれども、こちらにありますように経管理論と環境経営という科目を担当しております、経管理論ですけれども、研究科に入られる学生の方というものはいろんな分野から来られるということで、経営学の入門的な内容を中心に知っていただくことを目的としております。環境経営は主に企業の環境経営のバランスをどうとっていくか、具体的な企業を事例なんかを交えながら議論していくというような科目を担当しております。環境問題というものは地域の問題を含めていろいろと受容性が高まっておりますので、地域の問題も一緒に考えていくことも狙いとしております。

どうぞ宜しくお願い致します。

村山： 村山卓と申します。要覧で行きますと 9 ページに紹介がございますけれども、私は実務家の教員で 3 年間の任期でいっております、今年が 2 年目、昨年の 4 月から着任しております。担当している科目といたしましては、地域公共政策、自治体財政政策、それから実践型地域活性化演習という 3 つの科目を担当させていただいております。その他、後ほど紹介がありますけれども、地の拠点整備事業、COC 事業の関係を携わっております、その中で瀬戸内地域活性化プロジェクトというものをフィールドワーク型で担当しております。後ほど大学院生がこれに関わった、地域マネジメント研究科の院生が関わった事例についての紹介させていただきたいと思っております。

宜しくお願い致します。

大北： 大北健一と申します。宜しくお願い致します。授業科目は応用科目のマーケティング・マネジメントと意思決定分析という 2 科目を担当しております。マーケティング・マネジメントについては、地域マネジメント研究科の分析基礎科目のゲーム理論や経済分析を習われている学生さんが、マーケティングの文脈でそれらをどのように活用したらよいのかということに重きを置いて講義を行っています。他方で、意思決定分析については、経営戦略分野の標準的な内容をベースにしていますが、日々刻々と世界の研究者が発表している新しい研究の潮流をわかりやすく紹介することも心掛けて講義を行っています。

研究のベースは補完製品の競争と取引構造で、ハードとソフトを提供する企業間の取引関係を研究しています。その具体的な事例として日本の家庭用テレビゲーム産業を研究しています。そこでスピニアウトした研究内容を観光産業とか医薬品産業の研究に応用するという形でも研究を進めています。さらに、最近アントレプレナーシップの観点からの研究にも取り組んでおります。これからも研究成果をベースに教育を頑張っていきたいと思っております。

宜しくお願い致します。

佐藤： 初めまして、佐藤勝典と申します。宜しくお願い致します。私はこの4月から香川大学地域マネジメント研究科に務めさせていただきました。香川大学の地域マネジメント研究科では社会起業家論、それから地域観光マネジメントの2つの科目を担当させていただく予定でございます。

学内では、インターナショナルオフィスというものをさせていただいております。実は今年の3月まで東京にいまして、東北で被災当事者による社会的企業の研究をしておりました。これから香川に参りましたので、こちらで頑張らせていただきますので、どうぞ宜しくお願い致します。

長町： 長町康平と申します。村山先生と同じ2年目になります。担当科目としては経済分析と地域経済分析を担当しております。経済分析は、いわゆるミクロ経済学を教えております。分析基礎科目ということでビジネスや公共政策を考える上で役立つ経済学的な視点を身につけてもらう内容になっています。地域経済分析は、世界貿易といったグローバルな視点から地域や都市といったローカルな問題を考える内容になっています。特に経済分析で学んだ経済学的手法、考え方を使いながら、私の専門分野での最新の研究事例等を紹介しつつ、地域や都市の問題を考えていく点に特徴があります。

それ以外の活動としましては、外部を含めての活動となりますと要覧の11ページの上に私のプロフィール（公職）にある通り、に経済産業研究所の研究プロ

ジェクトメンバーとして研究に携わっております。2015年までと書いていますけれども、2017年まで延長され、引き続き東京大学の田淵先生達と協力しながら一緒に研究をしていく予定です。それから、昨年未ぐらいからスタートしたかがわ産業支援財団と

の共同研究があり、香川県内の製造業を対象として現状把握をするアンケート調査し、年度末には報告書を提出する予定です。

宜しくお願い致します。

中村： 中村と申します。宜しくお願い致します。私も今年の4月から赴任してまいりました。私の担当科目はマネジメント・アカウティング、要は管理会計になります。

先日授業の中でチームでもディスカッションをやらせていただきましたが、その中で製造業チームですとか、医療系チームですとか、四国電力チームで分けて進めていきました。その中で驚きだなと思いましたが、時間通りに来たのが製造業造チームのみなさんでした。また逆に安心、安全、安定を言ったのは、四国電力のチームでして、非常に特徴が出るものだと思って、私授業をしておりました。今後は皆さん、学生達の特徴は様々ですので、切磋琢磨しながら授業をしてまいりたいと思います。

どうぞ宜しくお願い致します。

三好： 初めまして、三好と申します。私も今年の4月から香川大学に赴任しました。それまでは佐賀大学で11年間、京都大学で1年間赴任しておりました。

要覧の12ページを見ていただきたいと思います。専門というか担当科目はファイナンス・マネジメントをやっています。授業はどういったものかと言うと、企業経営のうち資金に関するものや、また財務数値を用いた簡単な実証分析の方法などそういったことを主として学生の皆さんに教えている授業です。

佐賀大学11年間務めていまして、その時の研究が商品とか或いは企業とかそういったことを専門としておりましたので、そういったバックグラウンドとかを勉強できたらと思います。

どうぞ宜しくお願い致します。

関： 関庚炫と申します。2012年10月に着任いたしました。

要覧で申し上げますと、12ページに紹介を載せております。私が担当しております科目はマーケティング戦略とマーケティング・リサーチの2つの科目になります。

マーケティング戦略の方は消費者行動ですとか消費者心理に基づきマーケティングプロセスの基本的な内容を中心として講義をしております。また、マーケティング・リサ

一ちの方では、調査データの集計方法ですとか、分析手法といった比較的テクニカルな内容を中心として授業を進めております。

学内の委員会としては、着任して以来ずっと情報管理の委員をしておりまして、今年からは教務関係の委員を担当致しております。

どうぞ宜しくお願い致します。

吉澤： 吉澤と申します。一昨年12月に着任しまして、授業は今年で担当するのが2年目になります。担当しているのは、組織行動論と人事管理論でございます。私今まで副担当にございまして、地マネ、そして香川、四国の地に来るのは今年からが初めてでございます。何かこの地で私が貢献できることはないかなと思ひまして、最近では地域活性化人材のキャリアとコンピテンシーをテーマで研究を進めております。入り口として地マネの修了生の方にキャリアワークショップという形でキャリアを考えての街づくりですとか、キャリア面談ということで皆さんにキャリアを伝わるようなことをお願いしております。

どうぞ宜しくお願い致します。

原： 以上が本日参加させていただき教員になります。宜しくお願い致します。

ではここで資料の確認をさせていただきたいと思ひます。全部で10点あります。1. [ファイルにとじた資料] です。封筒には入っております、2. 「座席表」、3. 「出欠表」。そして、4. 水色の「香川大学大学院地域マネジメント研究科2014年度要覧」。それから先程もお願いした、5. オレンジ色の「香川大学大学院地域マネジメント研究科2015年度要覧」、6. 白色の「香川大学大学院地域マネジメント研究科概要2015年度版」、7. 緑色の表紙にオリーブの絵がございます [情報誌 地域マネジメント Vo 1.4]、8. 平成28年度入学 [学生募集のチラシ] (夏、秋、冬) 各1枚がございます。9. オレンジ色の [平成26年度修学案内]、そして「キャリアアップを目指す方へ朗報です。」、10. [教育訓練給付金] のチラシ (平成27年度、平成28年度) となっております。何か足りないものがある方はいらっしやいませんか。よろしいでしょうか。

事前にご説明を申し上げたときの資料と変更点が1点あります。それはファイルにとじた資料に通し番号が変わっております。

どうぞ宜しくお願い致します。

原： それではこれから 10 分程度お時間を頂戴して説明をさせていただきたいと思
います。この後は、どうぞお食事をしながら聞いていただきたいと思います。

私が説明をしているとなかなか遠慮して食事がしにくいというご意見もあつたん
ですけれども、天雲副知事と相談したところ、やはり時間の節約のために食事しながら
が良いのではないかとということで、遠慮せずに箸をつけていただいて、食べなが
ら聞いていただけたらと思います。宜しくお願い致します。（食事開始を確認）

それでは説明をさせていただきたいと思います。今日本では地方創生ということで、
全国で取り組みが進められておりますけれども、本研究科は 11 年前に設立いたしま
して、当時、こちらにいらっしゃる委員の方々にかかなりの支援を頂きまして奏で
をさせていただいたのを思い出します。

当時は、設置時にいろいろとチェックいただいて国際化の時代となる地域論とかか
なり言われました。いや、こういう国際化の時代だからこそ、ちゃんと地域のことを
しなければならぬのですとかかなり丁寧に説明をしましたら、なかなか分かって
もらいにくいという時代でございますけれども、そうした意味では今はまさにそ
ういう地域を支援することが正に一丸として行われるとなっているというのは非
常にありがたいな、我々がしていたことが間違っではなかったかなというよう
なことを確認させていただいてるところでございます。そういった意味では、十
数年前からそういう地域で戦略を考えると云いますか、地域の固有の特性を
ふまえたことができる人材を育成するということやってきたという意味では、
パイオニアとしてのニーズということがございますけれども、まだまだ足りない
部分がいろいろとありますがこの 10 年余りをやってきたことをふまえて、
これから更に 10 年をどうやっていくかをしっかり考えていきたいと思
います。ですので、そういった意味でのいろんなご意見を頂きたいと思
います。

原： 資料の最初の 1 ページ目には「アドバイザー・ボードの委員名簿」がござ
います。次のページには本日の「資料一覧」という形になっております。

最初に全体の話としまして、〔資料 17〕 189 ページをご覧いただけたらと思
います。本研究科の理念を確認させていただけます。先程もお話ししました通り、
本研究科の地

域活性化、地域に貢献する取り組みとして、ユニークな存在としてはじめさせていただきました。

「我が国の 21 世紀の最重要課題である日本再生の「決めて」として、地域の活性化・自立、地域における新しい経済社会活力の創造が求められています。このような我が国の緊急課題に対して、地方大学の果たすべき役割は大きく、地方大学となればこそ、地域の歴史文化、地域の特性を踏まえ、地域の求める経済社会のあり方を研究し、その地域づくりの主体的先導的担い手、地域創造中枢的担い手となるマネジメント能力の専門家を持つ養成することができます。本研究科はそのような人材を養成することを目指しています。」こういった形で、我々は研究に協力的に努めると宣言してやってきました。その下に書いておりますのは、一般的に経営系専門職大学院には人材を教育する基本的な使命が課せられております。更に、それに加えて「各校は固有の目的を設定し、差別化するように求めて」おります。これは実際、ビジネススクールの集まりの会があり、例えば、日本を代表するような慶應（大学）、一橋（大学）、神戸（大学）はグローバルにMBAの人材を共存しているという理由と本家のアメリカのMBAに対抗して、どういうところを売りにして日本のMBAは戦っていけるのか議論をされております。それだけ本校のビジネススクールは、中国のマーケットに対するアクセスを考える人材育成として優勢がある、ゲストスピーカーの先生はそうおっしゃっていただきました。差別化ということはMBAの中でも議論点となっておりますが、本研究科の場合は先ほども申し上げた通り、地域活性化に貢献するという焦点をあてておまして、あげておりますとおり、3つのリーダーの〔ビジネス・リーダー〕〔パブリック・プロフェSSIONナル〕〔地域プロデューサー〕を養成することを目指しております。「中四国でMBA、純粋な経営MBAとしては唯一のビジネススクール」であり、「国立大学としては2004年、4番目」にできた早い時期にできたものではありませんし、「政令指定都市にキャンパスがないのは香川大学のみ」などの特徴があり、地域に特徴、焦点をあてているという意味では差別できていますねと、ビジネススクールの創造期からお世話になっていた慶應大学の青井先生からも最初から差別できていますとおっしゃっていただきました。そうした意味では、特徴をしっかりと持っているかなと考えております。

191、192 ページに〔認証評価〕が書かれておりますが、一昨年に二度目の認証評価を受けまして、適合しているという結果を得ております。「2014年の4月から2019年3月まで5年間」が認められているということで、しっかりとした質、経営系の大学院

としても評価を頂いております。「特色」としましては、繰り返しになりますけれども、「多彩な専任教員・講師」「理論と実務の双方向教育」「きめ細やかな少人数教育」「社会人に便利な教育環境」「人的ネットワークづくり」があります。いくつかの「連携・融合」、地域に特色、焦点を当てたビジネススクールということで純粋な意味での経営だけではなく、「地域公共領域」という分野の先生方も含めておりますので、そういった分野的にも経営と地域公共の両方があります。実務家教員の方と研究科、そして社会人学生や学部卒性、そして民間の企業の方と行政の方など様々なバックグラウンドの方々がいるということで、「連携・融合」がかなりできる場でありまして、そうすることで今までにないコラボレーションの結果が出てきます。

こういった特徴を踏まえて、今後どういった方向を目指すかが最後の主題となりますけれども「10年の経験・蓄積を踏まえ、これからの10年」をどう発展するかについて、3つの大きな考え方を示しています。

1. 「日本型MBA教育のモデルとしての進化・成熟」。この「日本型」と言いますのは、MBAは元々、本拠がアメリカではございますが、そのアメリカの世界経済はリーマンショックの時にやや過熱した経済、成長モデルに対する反省が出てきたかと思いません。そういったビジネススクールにおいてもIPOを目指して、利益を得ることが1つの典型的なモデルにはなりますが、やはりいきすぎた場合には良くないことが経済全体、社会全体にあるのではないかと。そうした反省を踏まえて、あるべき経営ビジネスの在り方というものには少し違った要素を考える必要があるのではないかと思います。日本型は純粋な市場面からすると扁形だと言われたりすることもあります。実はそうしたバランス感覚というものが健全で長期的に見て適切な経済の在り方に適している、日本の経験はもう少しきちんと考えていいのではないかと考えます。そして、日本におけるような経験の1つとしまして本研究科は地域にこだわったこととすると。例えば、地方においては親戚企業といわれている企業はずっと長年雇用を確保しておりますが、急成長してアピールするのはかけ離れた存在でありますけれども、もう少し社会的な意義ということの評価されてもいいのではないかと思います。或いは地域、中小企業もですが、自然環境など瀬戸内の場合、独自の環境の都市というものが非常に近いところで、共存・共栄しているバランスのとれたライフスタイルを香川・高松エリアの特色ではないかと思えます。自然と都市、環境とバランスのとれたスタイルも地域にこだわってくることで見えてくる、暮らしのスタートと同時にビジネスチャンスもあるのではないかという

点など、地域にこだわった形は経営の在り方、経済の活性化の在り方など1つのバランスのとれた焦点としては非常に日本の重要なものではないかと。我々は遠慮がちでありましたが、そういう部分は胸を張って、日本型のMBAの1つであり地域から発信するという事は、世界中の方々が求めているのではないかという気がしまして、我々も足元の近くにある宝物をしっかりと捉えて、自信を持って発信していきたいと思えます。

2つ目は発信していくための1つとしても「地域活性化に関する研究を促進」したいということでもあります。今までわりとうちのビジネススクールは、ビジネススクールという意味では、社会人、専門職教員、教育に利点をおいて、こういった教育をしていますとアピールしていたつもりですが、逆にビジネススクールはどういった先生がいますか、顔が見えませんかというご指摘もいただいております。確かに我々教員がどういったことをやっているか発信していかなくちゃいけないと思えます。そこに書いてある通り「科経費採択率」が今年77.8%。昨年は100%だったのですが、この採択率はかなり驚異的な数値でして、香川大学の中ではいずれとしてNo.1です。全国的に見てもこの数値はなかなかないものでして、少数でありながらも非常に精鋭部隊、それだけ質的に見ても高い評価を得ている教員が揃っていると。実務家の経験を持たれている先生も同じところにいらっしゃることも、研究の拠点として進めていく中でかなりのベースができていくということだと思います。文科省は世界に誇る研究の中心ですから、地方、地域の貢献する大学ですかと二者択一を求める論法があるのですが、二者択一ではなく我々はその両方を選ぼうと。地域活性化の研究科としては世界的にも最先端なことをしているポジションを持ってこの10年間を目指していけばいいのではないかと思います。これは修了生と話をしても、四国エリアは中傘下企業の生産事例はかなり多いと。そういった意味では、フィールドとしても誇れるものを持っていますし、それを研究していた場合には、香川或いは四国というところは中心地になりうる拠点はかなりあるのではないかとこの意見はかなり伺っております。そういった方向での研究、地域活性化の研究の中心として発信していくことが1つの目標と思えます。

3つ目、先ほど申しあげましたように300人を超える修了生がおります。それだけでも蓄積ができておりますし、その方々は今やこちらの委員の方々ではあるのですが、民間企業や自治体のまさに中堅どころとして活躍していただいております。修了生のネットワークをさらに活用し、同窓会との連携を強めていきたいと思っております。同窓会も最初の会長は、一期生のかがわ産業支援財団の中山理事長が務められておりますが、今

年から二代目にパイプラインという会社の責任者である安藤君に代わりましたが、安藤君もここにいる間にかなりマーケティングのことを勉強して、人的なネットワークもできて非常に効果的であったということで、彼も自分の経験を是非、後輩に伝えて新しい企業を作るということをどんどんやってもらいたい、修了生の資源にしてもらいたいということを言っていたいておりました。既にリカレントプログラムも、修了生を集めた懇親会では副幹部が集まって、修了生をファウンドで現役学生のプロジェクト研究を支援したいという話もしていただいておりますので、具体的な修了生と現役生の間の連携、或いは修了生同士の連携も考えられると。そういったことを次々に支援することで、地方創生していきたらいいなと思っております。

これが大きく、本研究科の理念と今後やっていけばいいかなというところになります。

原： それでは、ファイルの資料の5ページを元に戻りまして [資料1] [資料2]。 [資料1] は経営系専門職大学院の一覧になります。本研究科は No.6 ですが、先ほど申し上げたように国立大学としたら4番目の早期から地域に密着した専門職大学院でございます。

そして [資料2] は「修了生・在校生の勤務先リスト」ということで、本日参加していただいている委員の方々の組織のリストもあげております。全体としては、最近の傾向としては自営業、或いは中小、このリストの後ろの方には1という数字が並んでおりますけれども、多様化してきている傾向があるかなと思います。特に地マネにおいては医療系が増えてきましたが、入試関係のところでも、性別の傾向も高塚先生が述べてされておりましたけれども女性が増えているということもございます。かなり多様化が進んでいる傾向が言えるかなと思います。

原： それでは、続きまして [資料3] の「平成26・27年度入学状況」については、入試委員長の高塚先生より説明をお願い致します。

高塚： それでは [資料3] 7ページをご覧ください。7、8ページが前々回の入試、今の2年生の入学になります。9ページから1年生の入学状況です。7ページの一番上の表にもありますけれども、男女合わせて28名の入学者でございました。定員が30名でござい

ますから、若干割ってしまって、昨年のアドバイザー・ボードでも懸念事項として申し上げたところでもございました。ただ、先ほどお話があったとおり、女性の入学者が増えておりまして、26年度入試でも3割を超えるくらいまで来ていました。

次に9ページをご覧ください。一番上の表の右下の男女の数を合計にありますように、40名の入学者となっております。非常に増えておりまして、いくつか理由が考えられますのは、先ほど申し上げた地方創生。もう一つは、資料として配っておりますこのチラシ「キャリアアップを目指す方へ朗報です。」。この教育訓練給付金というものが今年度よりはじまりまして、おおざっぱに申し上げますと、雇用保険に入ってもらえる方であれば、入学金、授業料をあわせて合計6割を国が助成してくれると非常に大きな助成金でございます。正確な数は把握していませんが、少なくとも10名くらいは、1年生は既に申請していらっしゃるという状況でございます。それから、男女比で申し上げますと女性の割合が増えておりまして、恐らく2ケタの女性、今回初めて超えております。14名で35パーセント。9ページの下のところを見ていただきますと、出身学部も非常に多様化しておりまして、医学系が増えてきております。

10ページを見ていただきますと、上に出身大学、こちらにも非常に多様な大学から来ていらっしゃいます。居住地別で見ますと、地マネも随分浸透してきたかもしれないということで、非常に広い地域から来ていらっしゃるという状況でございます。

最後に「入学者年齢別構成」ということで、こちらは従来通りでございますが、30代前半が中心になっているかなと。今年度は、いろいろな追い風が吹いて、入学者が増えて非常に良かったんですけども、これからこういう状況が一過性ではなく、続いて、たくさん努力していきたいと思っております。

入試については以上です。

原 : 続きまして、[資料4]「平成26年度プロジェクト研究」について、教務委員長の関先生よりお願い致します。

関 : それでは、[資料-4]12~14ページをご覧ください。

本研究科には、通常の大学院の修士論文に替わるものとしてプロジェクト研究というものも位置付けられております。主に2年次に行うもので、前期はプロジェクト演習、後期はプロジェクト研究という授業を通じて学生自らが設定したテーマについて取り組

んでいくという形になっております。その内容としては、従来型の学術的な研究論文だけでなく、ビジネスプランですとか、フィールドワークを通じて地域活性化に取り組むといった実践的な形のものもごございますので、修士論文と呼ばずにあえてプロジェクト研究という呼び方になっているわけでございます。そのテーマのリストが13ページに記載されております。リストをご覧になりますとお分かりのように、産業構造や経営課題の分析といったものから、農業ICT、スポーツ、医療福祉、エネルギー関係するものに至るまで、多様性に富んだテーマになっております。

昨年度は、その内優れた6件の研究を公開し発表を行いました。具体的にはNo.4の岡田さん、No.5の織田さん、No.8の石浜さん・岩田さんグループ、No.17の西田さん、No.18の西分さん、No.21の塩津さん・澄川さん・津川さんグループ、計9名・6組が報告させていただきました。

また、14ページをご覧いただきますと、香川県との研究交流会での発表者リストが記載されております。こちらは、一昨年プロジェクト研究のうち、その内容が優れており、かつ県からご指定いただいたものをいくつか選出し香川県のほうに報告させていただき県の方々との意見交換を行うもので、毎年行っております。このような形で、地域活性化に関する研究成果を学外に向けても積極的に発信しております。ぜひ参考にしていただけたら幸いです。

以上になります。

原：この県との交流会につきましては、今年は浜田知事から授業をしていただいたときに、これは非常に重要なものでもあるし、今年は各市町の人との仕事の関係、創造性の戦略を作らなければいけないということでは、県だけで閉じてはいけないと、市町にも拡大した文化という新しいアドバイスを頂きまして、今年に関しましては今調整を進めていって県だけではなく市町に拡大した形で実施する予定にしております。4月末から8月頭あたりに開催する方向でしております。

原：では続きまして、[資料5]「授業のアンケート」についてご説明をいたします。

本研究科では、半期ごとに講義終了後、授業を受講した学生にアンケートを実施しています。教員は講義内容、講義運営方法、教材等の改善のために参考にしております。

15～30 ページは平成 25 年度前期の授業評価です。22 ページにアンケート質問票がありますが、質問は、「シラバスとの整合性」、「講義内容の理解」、「説明の分かりやすさ」、「課題の量」、「課題の質」、「全体の満足度」の 7 つです。「全体の満足度」は、平成 26 年度前期は「全体の満足度」は、「非常に満足」（46.0%）「概ね満足」（40.0%）で、合計すると 86.0%が肯定的な回答を得ております。また、後期は「非常に満足」（37.0%）「概ね満足」（49.0%）で、合計すると 86.0%が肯定的な回答を得ております。

続きまして、「研究活動」についてです。〔資料-6〕 32 ページをご覧ください。こちらの資料は、平成 26 年度に専任教員が研究代表者として外部から獲得した研究資金の一覧を表しています。外部から 13 件の競争的研究資金を獲得しています。その内訳をみますと、科学研究費補助金日本学術振興会から 7 件、地方公共団体から 4 件、民間財団から 2 件となっております。COC の枠組みを通じて、多様な研究資金源から資金を獲得していることがわかります。このように専任教員は、文部科学省からの研究資金のみにとどまらず、それ以外の多様な資金源を積極的に開拓し、活発に研究活動を展開しております。

続きまして、地域・社会貢献活動についてです。〔資料-7〕 をご覧ください。33、34 ページは、平成 25 年度の専任教員の兼業一覧となっております。専任教員は、ここにありますとおり、自治体や国の委員や、その他、学会の理事など、合わせて、平成 24 年度は 41 件、平成 25 年度は 48 件の兼業をしており、地域・社会貢献活動に努めております。

原 : 続きまして、〔資料 8〕。35 ページの「瀬戸内地域活性化プロジェクト」のフィールドワークについて、村山先生よりお願いいたします。

村山 : 〔資料 8〕の「瀬戸内地域活性化プロジェクト」ですけれども、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」という取り組みの中で、香川大学が「瀬戸内地域活性化プロジェクト」を地方公共団体とともに行っているものです。こちらで紹介させていただくものにつきましては、地マネの大学院生が関わったものについて紹介させて

いただきます。全学としての「瀬戸内地域活性化プロジェクト」の取り組みとなっておりますので、学部生中心となるプロジェクトもありますけれども、地マネ生関わったプロジェクトになります。

35 ページは高松市・屋島の活性化プロジェクトになります。こちらでは屋島に行かせていただいたインタビューの場面を載せていただいております。屋島の水族館閉鎖後の復興に向けて調査を行いました。水族館が閉鎖してしまうと、地元の人たちが松島に来る機会が少なくなってしまう。こちらにありますとおり、宮城県の松島における事例を踏まえて提言を行いました。この松島の水族館は、観光客が来るというよりも地元の方々が来るということでした。屋島の水族館もなくなってしまうと高松、或いは香川の人が屋島に来なくなる可能性があるのではないかとということで、何らかの施設が必要ではないのかという内容の調査でございます。

36 ページの「高松定住促進プロジェクト」。これはプロジェクト研究の一環として行ったものでして、これから人口減少社会を迎える中で、人口定住・移住を促進しようという取組が各地方で既に行われております。その中では優遇策を行っていても他の地域のレベルに達してしまいます。その上でさらに住みたいと思われるためには高松市の市が持つ魅力をアピールする、市が持つ遊戯性を生かすことが必要だろうということで、転勤者が多い高松市の特徴を活かして、転勤した翌日から取り残されてしまう転勤者の奥様について、高松に対しての愛着の持っただき、その後も転勤生活が終わった後も高松移住の可能性を高めていく取り組みをして、転勤者の妻の地元愛着をもっと高めるといったような内容の調査でございます。

その下、「観音寺定住化促進プロジェクト」ですけれども、観音寺の市役所からは観音寺に住んでいる人たちが住み続けたくなる為の定住策を行いました。そうはいつでも我々観音寺から住んでいない者にとっては難しいものでしたけれども、外から目線での観音寺の魅力というものを町の人に対して案内する「まちあるきツアー」を企画したものにになります。

37 ページ、三豊市の「みとよ・粟島活性化プロジェクト」は、こちらもプロジェクト研究として行ったものです。農家の産直市場の事象を行いながら、生産者の小規模の農家が経営できるためにサポートが産直市場でできないかという調査した内容になります。その他、香川県、東かがわ市、丸亀市等から COC 事業を行っておりますけれど

も、今回は地マネの取り組みについての内容になります。この資料に「学生市場」のチラシを入れております。後程ご覧いただければと思います。

以上です。

原：次に[資料 9] 42 ページの第 11 回シンポジウム「讃岐×歌舞伎～歌舞伎って面白いの?～」について、関先生よりお願いいたします。

関： それでは、シンポジウムについてご説明させていただきます。[資料 9]をご覧ください。

毎年 9 月に行っている学生によるシンポジウムですが、昨年度は 9 月 20 日開催いたしました。42 ページがその概要で、43 ページが、学生が製作したポスター、そして 44 ページが告知となっております。第 11 回となりました今回のシンポジウムでは、学生が主体となり、問題・課題を選別しその課題に関する意思決定に新入生全員で取り組みました。「讃岐と歌舞伎」という大きなテーマに沿って、香川県各地にある歌舞伎の文化とその魅力を再解釈し伝えると同時に、歌舞伎の新たな楽しみ方や観光資源としての歌舞伎のあり方に関する提案と、42 ページに写真もございますが、学生による歌舞伎の実演も行われました。なお、その後は、44 ページのプログラムにもございますが、歌舞伎に詳しい 4 名の方をお招きし、パネルディスカッションを行うことで、学生による提案に関するご意見をいただきました。

今年度のシンポジウムも同時期に予定されておりまして、現在、新入生全員が参加しテーマの選別に取り組んでいるところでございます。今年のシンポジウムの成果につきましては、また来年度ご報告させていただきたいと思っております。

以上でございます。

原：次に、[資料 10] 45 ページの「オリーブマルシェ 2014 in KAGAWA」について、板倉先生よりお願いいたします。

板倉： 「オリーブマルシェ 2014 in KAGAWA」でございますが、[資料 10] 45、46 ページ、157 ページと 160 ページに読売新聞と四国新聞に載せていただきました記事がございます。2014 年 11 月 30 日に県花、県産品でございますオリーブの振興を図るということございまして、香川県のオリーブをより知っていただくというマルシェ型イベ

ントの丸亀町商店街のグリーンけやき広場にて開催いたしました。昨年度から本研究科の授業科目、オリーブ事業化マネジメントの講義を開始するなどオリーブビジネスの教育研究成果を一般の方々に知っていただくという取組でございます。香川大学と県内企業で作りますかがわアグリイノベーションズが主催しまして、香川県、百十四銀行、野村証券の多大なご協力を頂戴しまして開催することができました。オリーブ事業化マネジメントの講師でもあります東京のイタリアンレストランのオーナーシェフ 日高先生等による県産品、野菜等を利用したお料理ふるまっていただきました。オリーブ以外にもオリーブハマチですとかを販売いたしまして、多くの方に香川県のオリーブの持つ魅力と情報発信いたしました。

以上です。

原 : 次に、[資料 11] 47 ページの「MBA、こちら地域マネジメント研究科」について、濱谷さんよりお願いいたします。

濱谷 : 地域マネジメント研究科提供の「ラジオ番組について説明をいたします。[資料 11] をご覧ください。まず放送した番組名は「ラジオで学ぼう! 『MBA、こちら地域マネジメント研究科』」です。平成 26 年の 10 月 1 日~12 月 31 日まで、毎週水曜日の朝 8 時 30 分から FM 香川にて全 14 回放送を行いました。放送した内容に関しましては、地域マネジメント研究科で実際に授業をしている教員や講師の方に番組出演をしていただき、専門分野にかかわるお話や世間が注目する事柄などの解説・見解をお話いただきました。また番組の終わりに学生募集、公開講座、教育訓練給付金等についてのインフォメーションを行いました。

以上です。

原 : 続いて、[資料 12] 48 ページの「ナポリフェデリコ 2 世大学との国際研究協定」について、板倉先生よりお願いいたします。

板倉 : 48 ページに簡単な紹介がございます。オリーブに関する学術的・文化的な研究交流を通じて、地域活性化を引っ張りたいということで国際研究協定締結しました。3 月 13 日に私がナポリのフェデリコ世大学を訪れまして交流協定を締結しました。ナポリはカン

パニア州というところがございますけれども、カンパニア州の州政府の方も大変熱心でして、オリーブ鑑定士の養成の場でもあり多面ですとか、イタリアでも非常に日本食レストラン、和食が人気でございますが、イタリアのオリーブと和食をどういうふうに取り入れていったらいいのかと是非共同研究をしたいということでございました。今後5年間でございますけれども、共同研究を進めてまいりたいと思います。

以上です。

原： 続いて、[資料 13] 49 ページの「かがわ産業支援財団との連携協定」について、板倉先生お願いいたします。

板倉： 資料は 49 ページ、それから四国新聞の記事が 177 ページにございます。研究科は昨日 11 年になりましたけれども、これまでは香川県内の事例ですとか地場産業、中小企業、ベンチャー企業等の共同研究をもう少し増やしてほしいとご要望もございまして、どちらかというは今までは四国という範囲でして、より香川県内の地域産業、特に地場産業、農耕産業、中小、ベンチャー企業のネットワーク、或は支援事業に実績をお持ちのかがわ産業支援財団との連携することで、より地域に密着型のビジネススクールとして貢献してまいりたいと思います。具体的には、先ほど長町先生も紹介されていましたが、本年 10 月から公開講座、オレンジ色の要覧では 16 ページにありますが、地域の中小企業と経済活性化の公開をするということと、それから香川県の地域産業に焦点を当てた研究を行っている、ということで研究成果は冊子などにいたしまして年度ごとにまとめて広く公表していくと予定でございます。

以上です。

原： 続いて、主な行事は [資料 14] 50 ページ以降をご覧ください。

50 ページの「新入生ガイダンス」。

51 ページは行政のトップの方々に来ていただいたの「四国経済事情」の地域政策の授業。これには天雲副知事にもご講義をいただいたところでもございます。

55 ページの野村証券の資本市場に関する講義。

58 ページ、地域 ICT に関する授業など様々でございます。

80 ページは小豆島でロケをされました大森研一監督の招いての地域活性化ということについての講演会もさせて頂きました。

そして、62 ページは「リカレントプログラム」。これは修了生の方々を招いて年に一度行うものですが、通常毎年このリカレントプログラムに合わせて創造期から非常にお世話になった中山恭子先生に「四国経済事情」の一環としてご講義もいただいております。

そして、64 ページは、瀬戸内国際芸術祭の創造ゲッターの北川フラム氏に県の事業としての公開講座「アートと地域活性化」ということでしていただいております。今年度も後期に開講していただくことになっております。

67 ページは昨年度の「アドバイザー・ボード」の様子でございます。

68 ページその他、公開講座「四国のベンチャー企業」。

70 ページには、「IT を活用したビジネスモデルにおけるマーケティング戦略」。

72 ページ、「夏季集中講義「地域マネジメントとファイナンス」」。

73 ページ、地域活性化のリーダーの方々に来ていただいている「四国経済事情」の地域資源に関する授業。9月に集中して行われております。

78 ページ、公開講座で「これからの人事、人材育成」についての公開講座もしていただいております。

9月11日には、ダイバーシティをテーマとした公開講座も行われております。

そして82 ページは毎年行っております1年生を中心とした合宿ですが、昨年度は高知県の馬路村に参りました。そして理事長の東谷さん、「四国経済事情」の位置づけも込めて現場で講演をいただき、実際に農家に訪問させていただきました。今年は徳島県の亀山町に久しぶりに行かせていただく予定になっております。

89 ページは、通信授業の提供講義で地域活性化と観光創造でございますが、写真は徳島県知事の飯泉氏ですが、この公開講座の時には、先ほども紹介しましたFM香川の効果がもしかしたらかなりあったのか、放送した後の第2回目以降はかなり一般の参加者が増えまして、特に浜田知事のご講義の時には特別講義室が溢れるくらいの方がいらっしゃいました。

94 ページは、企業経営のトップの方々による授業をしております。

96 ページ、オリーブの関係の授業の講義もしております。

そして、100 ページは年に一度一週間程度、オープンスクールをして大々的に授業を開放してどういった授業をビジネススクールでやっているか体験していただくものです。

102 ページ、「香川ビジネス&パブリックコンペ」。これは共催という形で一般の公募で香川を元気にするためのビジネスプラン、地域活性化に関するプランの両方を 2 本立てで行っておりまして、優秀なものを 5 つずつ、合計 10 個に関して 11 月にプレゼンテーションをしてベスト案を決めることをしておりますが、さらにベスト 10 案に関しては 2 月にマッチングのイベントをして、実際にこの案と一緒にやっていきたい、或いは支援していきたいという方々ですとか、自治体、国や機関、民間企業の方々に前にプレゼンをしていただいて、別の部屋でさらに興味のあるものの話をしていたという機会も設けて、実際に進化性に繋がることを促進しました。実際にこの中の一つは、事業化が進んでその製品化がほぼできているということも聞いております。

107 ページは、CG や ai の専門家に来ていただいて、コンテンツ関係の技術が地域活性化に活用できないかという講演をしていただき、実際に屋島などのところを見ていただいて実行可能性のコメントをいただきました。

109 ページは、プロジェクト研究を大々的に公開して行う報告会の様子でございます。

110 ページは、修了式。

111 ページは、この 1 年間の新聞・テレビ等のメディアでのコンテンツに関する、露出に関する一覧です。

112 ページ以降は、実際の新聞や雑誌の記事を載せております。ご覧いただければと思います。研究科に関するもの、修了生・在学生に関するものなど様々な形でレポートしていただいております。

原 : 続きまして、一昨年にありました認証評価で指摘された「検討課題と課題解決計画」について、板倉先生お願い致します。

板倉 : [資料 16] 178 ページをご覧ください。この課題解決計画と申しますのは、認証評価でご希望はいただいておりますが、評価結果において検討課題なされた点につきまして、課題の解決を図る計画のことでございます。どのような対応を行うかは、各大学院

の判断にゆだねられているレベルのものでございます。ほとんどの内容につきましては、昨年度のアドバイザリー・ボードで報告済みでございますので、3点について簡単に申し上げたいと思います。

まず、178 ページの下にあります「固有の目的の学内での周知」が充分ではないのではないかとご指摘があるのですが、こちらにありますように、「まだ定めただけであり、これから浸透させていく段階」であると。様々な機会で本研究科の理念等を浸透させていきたいと思うところでもあります。先ほども入学者でもわりと香川大学から2名だったり、香川大学学内の進学者が少ないというところもございます。

それから179 ページ、「グローバル化に関する」ことで、地域振興とグローバル化の融合を図るために取り組みが必要ではないかというご指摘なのですが、「本研究科のコンセプトは地域活性化であり、グローバル化ありき」という訳ではございません。ただし昨年度から新しい取り組みとしまして、昨年の後期から「グローバル人財養成実践セミナー」と正式単位ではありませんが全90分×4コマのセミナーを実施しております。英語で実施されまして、「英語上達方法論、プレゼンテーションの進め方」などコミュニケーション入門と経営学の基本的な考え方を自分で英語で発表できるというセミナーを実施しておりました。アンケートを取りましたところ、是非続けてほしいという声が圧倒的でしたので、今年度も既に実施したところでございます。

それから、3点目でございますが、180 ページの上でございます「基礎科目群の取得」について、いわゆるビジネススクールの組織マネジメントに必要な専門科目であります組織ですとかセミナー、マーケティング、ファイナンス、会計の5分野を充分習得する必要があるのですが、必ずしも選択式になっておりますので、これが充分保障されているとは言えないのではないかとご指摘をいただいたものでございます。これにつきましては、基礎科目の終了単位数、今現在は3科目6単位でございますけれども、それを5科目10単位に引き上げることを昨年度に決定いたしまして、来年度入学、つまり28年度入学から適応することにいたしました。それから関連しまして、181 ページ下の「修了要件単位数」につきましても、32単位を40単位に引き上げまして、1年生から2年生への進級の要件も16単位から20単位に引き上げることが決まりまして、来年度入学から適応することにいたしました。以上です。

原 : このような状況です。

では、授業に出ておりました國村先生が到着されましたので、ここで簡単にご紹介をお願い致します。

國村： 國村です。担当授業は、アカウンティングとビジネス・アカウンティングという科目を教えております。公認会計士と税理士として実務家教員をしております。任期が3年までで今年の9月末までとなっております。

宜しくお願い致します。

原： それでは、委員の皆様にご意見などをお伺いしたいと思います。天雲委員長代理、お願い致します。

天雲： それでは予定が1時30分であまり時間がございませんが、委員のみなさん、この説明の中で、このビジネススクールの将来に向けてどのような取り組みをしていったらいいかご意見・ご提言等がございましたら、ご遠慮なくおっしゃっていただければと思います。どなたからでも結構です。それでは王先生、お願い致します。

王： 入試の結果についてご説明いただきましたが、26年度よりも27年度入学の方が、12名増えているので、高塚先生からは地方創生が背景にあるのではないかと、あと女性活用の国際的な部分で、もしかしたら全国的に女性の関心度や評価も背景になっているのではないかとのことでしたが、他に主題的に取り組まれた施策がきっと何かあったんじゃないかなと思うのですがどうでしょうか。

高塚： 先ほど申し上げた点で効いているのではないかなと、こちらの給付金が大きいのではないかなと思っています。それ以外に秘策と言いますか、今既に思い当たるものはないのですが、女性が増えてきている背景には医療・福祉系とか介護関係とかそういうお仕事をされている人たちがこういった地方都市で経営が厳しい状況になってきているので、マネジメントを学びたいと声は良く聞かれるようになりました。研究科長の話がありましたように10年前は大企業さんが複数名出してくれることがあったのですが、なかなかそういう形の入学者が減ってきていて、基本的には中小さんが主流と言いますか、多数になってきています。そのあたりになってくると、私たちもどういうところに

お声掛けしたらいいか、読み切れないというのが正直なところでして、大きな傾向としては先ほど申しあげたとおり、医療・福祉系が出てきていますけれども本当に私どもも知らなかった企業さんの方から来られています。あと、入学された方にアンケートを取りますと、やはり地域というキーワードに惹かれたという声が大きくありました。それは先ほど申しあげたとおり地方創生という流れの中で、何か地域支援もビジネスを考えたいという声を持つ人が増えてきているのかなと思っているところでございます。

王：先ほどご教示いただきましたが、やはり地元産業界と行政との関係づくりを出そうと研究科長をはじめ先生方にご協力をなされた結果、ある程度、最初の数年間は安定的にいくとなっていました、やはりある程度は減っていくと。卒業生のネットワークが、修了生が活躍されて外にPRして増えていった紹介で応募しましたというような、その辺の統計やフォローというかご教示いただけるものがありましたらお願いします。

高塚：具体的にこの人から聞いたとか、詳しい数字までは抑えきれていないのですが、最終的に入学を決め手になった背景にはホームページや資料だけではなくて、直接知り合いを通じて卒業生に聞いたりですとか、そういったことは確かに多かった例にあります。そういう繋がりがさらに強化していったら良いかは私たちにとってもまだ課題なのかなという気はしております。

原：確かに地道な営業と言いますか、学生を集めるための周知活動を我々教員はしているのですけれども、何かしていますかと言われれば、教員の方が周知してその方が入った場合は研究費の補助があるのですが、それはそんなに多くはないんですよね。

板倉先生、実際に補助が出たのはどのくらいありますか。

板倉：5、6件でした。

原：取り組みとしては、そういう個人の教員がアプローチをして入った場合に研究費としてそれを何万円か出すということはしておりますね。

王 : FM のラジオは地域マネジメント提供の広告予算で、広告の一環でしょうか。それとも地域貢献という意味で番組でしょうか。研究科前面に押し出して専任の先生と実務家の方がご出演されたのでしょうか。そういった何らかのデータを一回ごと、週ごとにほしいと思います。

高塚 : 先ほど、入学生のアンケートとしてみますと、実際に入った方で FM を聞いていたかという、それほど多くはなかったんですね。ただ、間接的には影響はあったのだろうと。さっきの特別公開講座もたくさん来てくれたりとか、いろんな意味で良いコンタクトだったといいますか、それが入学者を増やしたというのが人気でないだろうと。

原 : そういった意味では決定的にこれだと説明できるものが確かにあまりなくて、いろんなものが少しずつ聞いているのではないかなと、先ほど高塚先生が教育訓練給付金に関しても、当初もっとかなりこれが増えていくのではないかなと予想していた割には、確かアンケートを取ったときには、使っているのは 1 ケタですかね。

高塚 : 全員もらえているわけではないので、10 名程度はいると。

原 : 或いは、入学してから聞いてそんなものあるの、という方が 2、3 名いるという話があったくらいなので、当初見ていたよりかは多くはないのかなとこともあって、やはりこれも一部の要因だろうと。やはり様々なことが少しずつということで、決定的にこれというものはなかなか言いにくいというのは感じているところですね。

天雲 : それでは頼富委員お願い致します。

頼富 : 今のお話と共通すると思うんですけども、111 ページに「新聞・テレビ報道一覧」というものであるんですけども、やっぱり認知度という意味において、香川大学のビジネススクールから出しているプレスリリースが、この中の 10 くらいしかないということで、やはり学生に対する認知度を上げるためにもこちらの方から良い研究成果を上げて出てらっしゃるのですから、これは費用がかからないところなので、もう少し発信していった方が良いのではないかなと思います。確かに今後いろんな分野で非常に一歩

描いている、これをもっと地域に対してアピールしていく方向もとっていったら良いのではないかなと思っております。

原：確かにもう少し発信の努力といいますか、プレスリリースという点で、もう少し努力する価値があると思います。

天雲：では、私の方から。私、実はこの大学の経営協議会に参加させていただいて、本年度も何回か各学部長さんとお会いしておりますが、やはりビジネススクールの存在がどうも学内では薄いのかなと、対外的に良いことをやっているのに大学の中で存在があまりないのかなと気もしているので、先ほど板倉先生がおっしゃっていましたが、香川大学の中でのビジネススクールに来るのが少ないとおっしゃっていましたよね。そのあたりは学内から卒業生を来ていただく努力も必要なのかなと。どちらかという和社会人が中心で大学生がここに来るのは抵抗があるのかもしれませんが、少しはそういう方も入りやすいような環境というか形も少し考えた方が良いのかなと。そうなれば、ますます大学の中で存在が増してくるのではないかと思います。10年になりますので対外的には結構存在がありますけれども、大学の中で少し影が薄いかなと思っております。

原：確かに大学の中で理解していただく努力は、なかなか難しいといいますか、足りない部分はあると思っております。この間も学長選挙がありましたが、選考委員に部局長としては、うちの、つまり私が入っていないと。なぜ入っていないのかと非常に不思議なのですが、今度の部局長等会議で質問しようかなと思っておりますけれども、そういったところでも研究科の何か意見を伝える機会がやや限定的な部分は何故かあるなど感じております。ご提案いただいた学内から来ていただくようにという努力も確かにそうだなあというところもございます。今 COC+という COC のさらに次のバージョンをどう申請するかということがありまして、それを議論している中で、例えば1つ提案しているのが、他の理系の研究科で基礎研究をされた中には凄く事業化しようとする方がいらっしゃるの、そういった方にうちの MBA に来ていただいて、基礎研究を事業化するうえでも勉強をしてやっていただくという促進するのはどうかと。その中の場合には少し授業料を減免するとか促進策を持って、そういう方には特待員と言いますか、促進する支援策を奉じてもいいのではないかと、それでさらに企業を作って雇用できればまさに

地域のとっても自治体にとっても良いということになりますので、そういうことはどうかと提案をしていただいて、こちらに来ていただく支援という手があるなど。それが学部学生からそのまま来られる場合は、うちの場合議論しているところで、社会人は経験が豊富なところに経験がない学部生が来た場合はディスカッションをよくしたりしていますので、そこで経験が浅い学部生はやや不利なところがあるということで社会人からもややクレームがあったりするケースもあるということで、悩ましいなど。一般学生も非常に優秀な、見どころのある方が来られる場合もあります。そういう意味では閉じることもできないし、できれば来てほしいのですけれども、それでCOC+でかなりいろんなフィルムに入って頑張ることで社会人とまではいかないけれども、ある程度地域の現場で活性化の取り組みをするという経験もしてから、そういう方が社会人にも押している、そういう経験を持ってこられるのではないかと。COC+と専門職大学院を結びつけることも手かなと議論させていただいて、何とかうちの場合は社会人が中心でいろいろやりますし、他の局の学部生がしていることと違う部分が多いので理解をしてもらいにくいこともあるのですが、そういうところ接点を作って分かっていたら、そしてその後の相乗効果があるような形で理解していただければなと提案して議論をまさにしているところでございます。学内からも良い形で来ていただいて全体として盛り上がるのが少しでもできればと思っております。

天雲： それでは馬場委員お願い致します。

馬場： 言いたいことと言いますか、ご質問でお時間いただいて恐縮なのですが、冒頭で中村先生から四国電力チームというお話がございましたけれども、四国電力チームとはどういうものであったかもう少しお話よろしいでしょうか。

中村： そのメンバーは四国電力出身の学生や他にも子会社ですとかそういうところのメンバーがおりましたので、5チームでディスカッションしていただいたのですが、出身でどういった発表の内容に違いが出るか見たかったので、医療系のチームですとか、市役所関係、県庁、市役所など四国電力関係の方でチームを組むとどんな違いが出るかなと思っていましたので。

馬場： それに関連して、先ほど四国電力チームは安全安心というところに特徴があったとおっしゃっていただいたんですけれども、確かに私も自分のことを含めて社員のことを考えますと、そちらの方に拘りがあったのかなと思います。手前どものことを話して恐縮ですが、来年度から電力の小売全面自由化ということで、自由にどこからでも四国のお客様、一般家庭のお客様が、電気を買えるという時代になってまいります。そういう中でも勿論、安心安全は大事なんですけれども、それだけではなくて、こちらの研究科でいろいろ培ってきたアイデアや地域に対する関わり方を含めて、社員がいろんな知恵を働かせて会社を少しずつ変えていく、そういう必要性を感じているところでございます。従来から当社グループを含めて、こちらに学生さんを送らせていただいて、だいぶ人数も蓄積されてきております。1つこちらの研究科のテーマとして、修了生がどんな仕事をして、どういうふうに学業を活かしていくかという課題がおりになると思うのですが、私の感じでは当社でいうと、それぞれの部署で地域に対する思いを持ちながら、非常に応用力の高いこちらの授業を活かして、学んだものを直接活用できなくても、根底に流れる思いというものをそれぞれ持ちながら仕事をしてきているのかなと、そんなことを思ったりしております。代理で参りましたということもあって、要望をなかなか申し上げにくいのですが、当社あるいは私の思いとしては、こちらでの勉強・学業がビジネスの世界でうまく、今後生きてきたら有難いなと思っているところでございます。

天雲： 加藤委員お願い致します。

加藤： 感想含めて、意見を申し上げさせていただきますと、市の方からも毎年2名程度職員を派遣しておりまして、本当にフィールドワークしたものを終了した後も報告会などしているのですが、先ほど県の取り組みをお聞きして今年から市の方にも拡大していただけるとのことで、非常にありがたいと思っております。プロジェクトの研究なんかも発表してもらって、そんなことももう少し政策的に反映できるような仕組みを作っていたら良いのかなというふうに思っております。それと冒頭で自己紹介を申し上げたのですが、以前一緒に共同研究をしました。非常に我々は今でも良かったと思っておりますし、活着しているということで、できればそういったもう少し大きな政策提案的なものはできないかなと思っております。ただ、時代が変わってきてまして、方向性が決まっていますので、なかなか難しいのかなと思っております。今、高松は地（知）の拠点整備事業

を一緒にやっていますが、どうしても仕方ないですが、プロジェクト的なものの研究が中心なので、もう少し違った形で何か政策提案的な研究ができないかなというのが率直な意見です。加えて申し上げますと、拠点事業も3年目になるんですかね。当初お話があった時に市の方も内部で議論があって、とにかくやりましょうということで予算を取る時、議会の説明に苦勞しまして、具体的なものが分からなかったの、逆に今、成果が問われてくると思いますので、より良い成果が出るようお願いしたいというのが要望になります。

宜しくお願い致します。

原 : 村山先生、何かございますでしょうか。

村山 : COC、平成25年度に置かれて、今3年目になりまして、先ほど原先生からお話がありましたCOC+をとることも1つの条件になっていくことになります。なかなか難しいところも一部あります。学部の学生の教育というのが1つのターゲットで、文部科学省さんはそれを期待している一方で自治体との委託或いは補助での授業で行っているので、自治体に対してのアウトプットも出さなければならない。学部生中心と言ってもさらに1年生、2年生が中心になっていきますので、なかなか研究成果で自治体に報告するとなるとそこも逆を見るのが難しいところがあって、そこは教員であるとか、或いは地域マネジメント研究科の学生が入っているプロジェクトであれば、そこは役割に入っていくかなと思うのですけれども。1年生、2年生に関わってきた学生も段々と3、4年と発展していっていますので、段々と中身が行っているようにも思えます。また、私も実務家教員なので3年間しかいないということもありますし、大学の3年、4年までゼミ等で持っていることもないので、そこも1年から持ってきた学生も受け持つという面でも、学部を担当している先生方はより多く関わっていくということになっていまして、この5年間だけではなくてその後の活動も繋いでいけるような展開として大学の本部の方でも体制を整えてさせていただきます。

原 : このCOCに関して、その拠点事業に関しては確かにいろんな課題と言いますか、これは先ほどの天雲副知事からも言われたことに関係すると思うのですが、COC+に関しては、COC+に関する学部の議論の方が中心となっていて、ただ自治体さんと話をした

ら、必ずしも学部の学生の必要はないと言うことを言う自治体さんもいらっしゃるんですけれども、全体としては学部の物だというような認識で進んでしまっている部分があって、我々としたら何故そうなんだと、つまり雇用喪失とかに繋げるのであれば別に学部に限る必要はないし、うちのような社会人を多く抱えてやっていうところの方が雇用喪失という本来の目的には近いところがあるので、そういうのもっと活用してくれたらどうかと問題提起もしているんですけれども、なかなか、いやこれは学部のものなんでという話についついなってしまうことがあって、そこは本来すべきところと何故か焦点が当たっていつている学部というところの間でうちが、何が効果的なのかというところで悩ましい議論をしているところがあります。それと加藤さんから最初に言っていただいたもう少し大きな政策的な取り組みということも、やはりそうだなと思っているところがあって、このCOCの取り組みでいったら、個別の案件で何かをしていただくというような形の大学と自治体の連携になっているので、どうしてもプロジェクトベースというところで限定的な役割をすることになってしまうと。大学側がその能力と言いますか、そのものを活かさせていただくのは果たしてこのフレームで良いのかなと。ちょっと勿体ないのではないかなと思いがしております、先ほどももう少し大きな枠組み、政策提案ができないかと言っていただいたのは、まさにそういうところの問題意識を共有していただいているのかなと思いますので、是非もっと大学の資源を活用して良い形で地域に活用するにはどういう仕組みをしていったら良いかと。そのモデルとして前に行った公益養成の共同研究を念頭に置きつつ、少しそういう仕組みを是非一緒に考えさせていただければありがたいなと思っております。ありがとうございます。

天雲： もう他にございませんか。ないようでしたら、これで原先生にお任せしますので、宜しくお願い致します。

原： 本当にありがとうございました。今後の参考になるご意見を沢山いただきましたことを、大変感謝申し上げます。今日いただきました貴重なご意見をしっかりと受けとめまして、先生方と検討を重ね、取組んでまいりたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。最後のご挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。これをもちまして、最後のあいさつにかえさせていただきます。本当にありがとうございました。

II. 説明資料

- ・香川大学ビジネススクール 2014 年度 要覧・概要・情報誌
- ・香川大学ビジネススクール 2015 年度 要覧・概要・情報誌
- ・平成 26 年度 修学案内
- ・学生募集チラシ
- ・教育訓練給付金チラシ

■ 関係資料

- 経営系専門職大学院一覧 資料 1
- 修了生・在校生の勤務先リスト 資料 2

■ 教育活動

- 1) 平成 26・27 年度入学状況 資料 3
- 2) 平成 26 年度プロジェクト研究一覧 資料 4
- 3) 授業評価アンケート結果 資料 5

■ 研究活動

- 競争的研究資金 資料 6

■ 地域・社会貢献活動

- ① 平成 26 年度兼業一覧 資料 7
- ② 平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月：
「瀬戸内地域活性化プロジェクト」でのフィールドワーク 資料 8
- ③ 9 月 20 日：第 11 回シンポジウム 資料 9
「讃岐×歌舞伎～歌舞伎って面白いの？～」
- ④ 11 月 30 日：オリーブマルシェ 2014 in KAGAWA 資料 10
- ⑤ 10 月 1 日～12 月 31 日：FM 香川 786 SUPER MEDIO
「MBA、こちら地域マネジメント研究科」（資料 11） 資料 11

⑥平成 27 年 3 月 13 日 :

ナポリフェデリコ 2 世大学との国際研究協定 資料 12

⑦平成 27 年 3 月 27 日 :

かがわ産業支援財団との連携協定 資料 13

■おもな行事 資料 14

平成 26 年

①4 月 4 日 : 入学式・新入生ガイダンス

②4 月～7 月 : 四国経済事情 (地域活性化と地域政策) 全 15 回

③4 月～8 月 : 野村証券グループ提供講義「地域開発と資本市場の役割」全 8 回

④4 月～7 月 : 「地域 ICT マネジメント」全 15 回

⑤5 月 16 日 : 公開イベント

「瀬戸内にこめた映画の夢、地域への思い

～「瀬戸内海賊物語」の大森研一監督を招いて～」

⑥5 月 17 日 : 香川大学大学院地域マネジメント研究科リカレントプログラム

⑦5 月～7 月 : 公開講座「アートと地域活性化」全 5 回

⑧6 月 18 日 : アドバイザリー・ボード

⑨7 月 3 日 : 公開講座「四国のベンチャー事情」

⑩7 月 4 日 : 公開講座

「IT を活用したビジネスモデルにおけるマーケティング戦略

～新規事業の立ち上げと成長を加速させるイシューマーケティングについて～」

⑪8 月 : 夏季集中講義「地域マネジメントとファイナンス」

⑫9 月 : 四国経済事情 (地域活性化と地域資源) 全 15 回

⑬9 月 8 日 : 公開講座

「これからの人事、人材育成

～組織主導の「人材管理」から個人重視の「人材開発」へ～」

⑭9 月 11 日 : 公開講座

「障害者雇用とダイバーシティ～究極のダイバーシティ対応を

「株ぐるなびサポートアソシエの取り組み」から学ぶ～」

⑮9 月 27, 28 日 : 高知県馬路村合宿・四国経済事情 (地域活性化と地域資源)

高知県馬路村農業協同組合理事長 東谷様による講義

⑯10 月～2 月 : 公開講座「地域活性化と観光創造」全 15 回

⑰10 月～2 月 : 四国経済事情 (地域活性化と企業経営) 全 15 回

⑮10月～12月：オリーブ事業化マネジメント 全15回

⑯11月8日～14日：平成26年度オープンスクール・ウィーク

⑰11月30日：香川ビジネス&パブリックコンペ2014

⑱2月20日：公開イベント

「コンテンツ&デジタルテクノロジーは、地域をいかに変えるのか！
～日本CG産業のレジェンドと、コラボレーションビジネスの
フロンティアを探る～」

㉑3月14日：プロジェクト研究報告会

㉒3月24日：第10期修了式・学位記授与式

■付録..... 資料15

㊤新聞・雑誌記事

■検討課題の課題解決計画..... 資料16

■これからの課題と目標..... 資料17

Ⅲ. 出欠表

アドバイザー・ボード出欠表

	氏名	会社名・役職	出欠
経済界 (五十音順)	(委員長) 松田 清宏	四国旅客鉄道(株) 取締役会長 四国ツーリズム創造機構 会長	×
	家高 順一 (代理) 馬場 一壽	四国電力(株) 取締役副社長 四国電力(株) 執行役員 経営企画部調査役	×
	高濱 和則	大倉工業(株) 代表取締役社長	×
	竹崎 克彦 (代理) 頼富 俊哉	(株)百十四銀行 会長 高松商工会議所 会頭 (株)百十四銀行 執行役員 営業統括 部長	×
行政 (五十音順)	大西 秀人 (代理) 加藤 昭彦	高松市 市長 高松市 副市長	×
	天雲 俊夫	香川県 副知事	○
研究者	王 効平	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科 研究科長	○
教員	原 真志	教授、研究科長	○
	高塚 創	教授、副研究科長	○
	板倉 宏昭	教授	○
	木全 晃	教授	○
	村山 卓	教授	○
	大北 健一	准教授	○
	國村 年	准教授	○
	佐藤 勝典	准教授	○
	長町 康平	准教授	○
	中村 正伸	准教授	○
	三好 祐輔	准教授	○
	関 庚炫	准教授	○
吉澤 康代	講師	○	

出席者 18名